

## 「イスラーム的」動員の回路——スーフイズムと市民運動

森山 央朗

(同志社大学准教授)

「イスラームには僧侶や聖職者はいない」と言われる。しかしその一方で、ウラマーと総称される宗教知識人やスーフイーと呼ばれる神秘主義修行者が、宗教指導者として強い社会的権威と影響力を行使してきた。ウラマーやスーフイーは、宗教的な知識や徳に秀でていると認められた人々として指導的な立場にあり、その意味において、僧侶や聖職者と同様の社会的機能を果たしてきたのである。

ただし、ウラマーやスーフイーの指導力や権威は、寺院や教会に相当する組織や機関によって認定・管理・保証されているわけではない。イスラームには、信徒を一元的に管理する組織や機関が存在しないからである。そのため、ウラマーやスーフイーの宗教的権威と社会的影響力は、周囲の評判に依存する曖昧な部分が多い。このことを、政治・社会運動との関連から見ると、イスラームという宗教を利用してムスリムたちを動員する際に、動員する側がどのような資格でそれを行い、動員される側がどのように権威や指導権を承認して反応しているのかが、組織や機関の側面からは明瞭ではないということになる。

もちろん、それは、イスラームを利用した政治的・社会的動員がなされてこなかったことを意味するわけではない。近現代においても、多くのムスリムを動員したイスラーム主義運動が複数存在している。本プロジェクトでは、スーフイー教団と、直接的な政治運動を掲げない「宗教的な」市民運動に焦点を当て、スーフイー教団の歴史を概観した上で、近現代において変革されたスーフイズムである「ネオ・スーフイズム (Neo-Sufism)」を見た。そして、「ネオ・スーフイズム」と宗教的市民運動としてのギュレン運動 (Gülen Hareketi/Gülen Movement) との関係を観察し、ムスリムを「イスラーム的」に動員する回路のあり方に考察を加えた。その概要は以下の通りである。

18世紀以前の近現代においては、古典的なスーフイー教団が「聖者」の権威によって強い動員力を持ち、大多数のムスリムが特に意識することなく教団に関わっていた。19世紀以降になると、「ワッハーブ派」による否定、近代的合理主義や科学思想に基づく批判などによって、スーフイズムの正統性とスーフイー教団の権威は大きく揺らいだ。そうした状況への対応をとおして現れた「ネオ・スーフイズム」は、迷信的な「奇蹟」の演出や他宗教との混淆を排除し、イスラーム法の遵守と『クルアーン』とハディースへの回帰を強

調する純化志向を持つとともに、教団のメンバーシップの管理を厳格にするなど強い組織性も持った。

こうした強化された組織性は、その一方で、教団に関係する者としなない者とをより厳格に分けることにもなった。19世紀から20世紀にかけて、国家が「世俗化」し、社会的にも教団に関わることは「後進的」とも見なされるようになり、教団に関与しないムスリムも増えていった。そうした中で、強い組織的凝集力を示す「ネオ・スーフィズム」教団に関与することは、関与する本人にとっても意識的にならざるを得ず、周囲からは特定の教団のメンバーとして選別されるようになった。

19世紀以来の「ネオ・スーフィズム」は、「脱宗教」や「宗教の個人化」が進んだ近現代における「宗教」がある程度共通して直面してきた問題を共有してきたと言えるが、20世紀後半における「新宗教」的なスーフィズムも「ネオ・スーフィズム」と呼ばれる。すなわち、イスラームという伝統宗教の枠組みを越えるような普遍主義的で多元主義的な傾向を持ち、スピリチュアルな実践として欧米で受容されたようなスーフィズムである。ギュレン運動は、19世紀以来の組織性の強い「ネオ・スーフィズム」の系統を引きつつ、20世紀後半の「新宗教」的な「ネオ・スーフィズム」の側面も併せ持っていると言える。

しかし、そうした「新宗教」的な普遍主義や多元主義が、組織性の強さに起因する周囲からの異質感を緩和しているようには見受けられない。むしろ、場合によっては、周囲からの異質感や疑念を強化しているようにも感じられる。この場合の疑念とは、自分たちの出自や立場を、意図的にぼかしているのではないかという疑念である。

ここから、ギュレン運動が抱えるジレンマを見ることができよう。すなわち、普遍主義的・多元主義的主張を、状況の変化や語りかける相手に合わせて発信し、多くのムスリムを惹きつけ、彼ら／彼女らを凝集力のある運動に組織すればするほど、運動に参加しないさらに多くのムスリムの反感や疑念を強めるというジレンマである。ギュレン運動の勢力の拡大を警戒した公正発展党政権は、このジレンマの結果、トルコ国内で増大していたギュレン運動に対する反感や疑念を利用したとも考えられるだろう。

以上の議論からは、「イスラーム的」にムスリムを動員する回路は複雑であり、その成果や影響も予想が難しいことを指摘できる。特に、スーフィズムとスーフィー教団の権威だけでなく、イスラーム自体の正統性も大きく揺らいできた近現代においては、18世紀までのスーフィー教団のような、多くのムスリムが疑問を抱かない動員の回路は存在していない。「ネオ・スーフィズム」であれ、イスラーム主義政党であれ、「イスラーム的」な思想や運動を掲げて多くのムスリムを動員すると、それ以上に多くのムスリムの疑念や反感を買うという状況が続いてきた。

「正しいイスラーム」をめぐる議論が錯綜しているために、ムスリムを「イスラーム的」に動員する回路も分裂し、複雑に絡み合っているのである。にもかかわらず、中東の政治などを語る際には、イスラームの影響力を単純に捉える傾向が強い。しかし、ここまで見てきた「イスラーム的動員」の複雑さを踏まえれば、どのような勢力が、どのようなイスラームを掲げて、どのようなムスリムを、どのように動員しようとし、どのような結果に帰着したのかについて、細密な実証分析が必要になると言えよう。そのような分析を蓄積することで、ムスリム諸社会における政治的一変数としてのイスラームを的確に評価することができると思われる。